

光一中だより

教育目標

- 自主的に学び、考え、実行する人
- 心豊かで、ともに助け合う人
- 健康で、勤労を愛する人



練馬区立光が丘第一中学校
校長 山谷 安雄
令和3年度第4号
令和3年7月9日

言葉の意味

校長 山谷 安雄

1学期が終わろうとしています。大きな事件事故がなかったのは、うれしい限りです。昨年と違って夏休みは42日間あります。様々な経験ができるときでもあります。ゲームやスマホから離れ、子どもたちには、何かに熱中してもらいたいと思います。先日ある新聞を読んでいたところ大変感銘を受けたものです。紹介します。

桜樺細工で有名な岩手県のある集落では、7月初旬、桜の木の皮を採りに村人が山に入る。すると、よく熊の親子を見かけるといふ。野イチゴが実るこの季節、母熊が子熊に野イチゴを食べさせに来るのだ。実は熊の子離れの時期で、母熊は子熊が野イチゴを食べている間に、そっと離れる。二度と会えないことを承知で、子熊を残していく母熊の思いはいかなるものだろう。

子熊の方は、野イチゴを夢中で食べている。そしてふと振り返ると、母熊はいない。永遠の別れである。そこからは自分の力で生きていかなければならない。甘い野イチゴは親子を断ち切るための手段であり、親から子への最後のギフトでもある。

厳しい自然の営みに、人の世にも通ずる親子の情愛を感じ、いつしか村人は「いちご離れ」と呼ぶようになった。

「いちご離れ」には、熊の親子を守る村人の温かい眼差しと自然への敬意が込められている。「言葉」は風土に生まれ、先人たちの悲喜交々を抱えて長い歳月を経て残った一雫だ。それらを次の世代に伝えていく義務が私たちにはある。ある俳人の言葉でした。

理系の私が、20代の頃にもしこの文章を読んだとしたら、熊の親子は大変なんだと思うだけで終わってしまいました。地元の人が「いちご離れ」という言葉で、熊に対する温かい眼差しと自然への敬意など気づきもしなかったと思います。言葉のもつ奥深さは、いろいろな小説を読む中で、身に着けてきたことなのだと60歳を超えて感じるようになりました。

中学生の中にも私と同じくらい本を読む生徒が時々います。その生徒の書いた文章は洗練されていたのを今でも覚えています。

ところで、今の私たちにとって親子熊の厳しさに学ぶものがあります。親離れ、子離れは、意識していかなければならないことは間違えありません。今の時代に合った子離れを考えていきたいものです。



朝読書の様子

